(22) 諏訪神社（すわじんじゃ）

住　所：　三重県伊賀市諏訪1616
TEL　　：0595-21-5864
参拝日：2013年12月11日、2014年6月15日

御本殿祭神　　建御名方命、大己貴命、　八坂人姫命、
相殿合祀神：建速須佐男命、金山比古命、金山比賣命、天水分神、倉稲魂命、大山祇命、
誉田別命

石橋と石灯籠と鳥居

参道

拝殿

石の鳥居をくぐり、橋を渡ると右手に大きな石灯籠があり、次いで木の鳥居の向こうの参道両脇には役10戸の石灯籠が並んでいる。石段の手前左手には手水舎があり、右手には上野市指定天然記念物の注連縄が張られた大杉が立っている。“諏訪神社の大杉の由緒記”によると、
「当神社は朱雀帝（930-945）の頃、真諒山長楽寺の境内に甲賀三郎兼家が自己崇敬の諏訪神社を信州より勧請したと伝えられ、天正の乱後の明暦3年（1657）本殿を再興、大正2年長楽寺を廃し、後年地区内神社を合祀、今日に至っている。平成5年11月、環境庁が行った巨樹、巨木調査の結果、伊賀地方での巨木と言われ、地上8.6mのところで大幹と小幹に分岐しているところから地域では伊賀一の夫婦杉と称し、保存管理している。樹齢役400年と推定され、この巨木の岩根の規模など虚空にそびえたつ様は幾百年の星霜に耐えてきた御神木として古く神社の歴史を物語っている。樹高46m、地上1.5mでの樹幹周囲6.18m、直径：長径2.18m、短径1.47m、根本樹幹周囲7.4m、上野市指定　平成7年4月27日（諏訪文化財保存会）」

石段を上ると、寄せ棟造り平入り唐破風の拝殿がみえる。本殿は流造で、本殿への石段の両脇には阿吽の狛犬が守っている。境内の灯籠には鹿とカタツムリが彫刻された石灯籠があった。境内神社として神明社（大日言貴命）と阿拝社（伊賀津彦命）が祀られていた。社叢はカナメモチ、スギ、ヤブツバキ、マンリョウ、サカキ、シュロ、アカガシ、シラカシ、ナンテン、シロダモなどが観察された。

祭祀は例祭が10月10日、宗旨7月第3日曜日、八朔祭9月1日などがある。また、7月1日には「田の虫送り」と呼称する神事が行われる。古く田の虫を一ケ所に集めて豊作を祈る民俗風習である。思い思いに松明を造

本殿

狛犬

り夕方六時頃神前に集合し、祭典の後、田の畔を通って部落の南方の丘に集まり松明を一ケ所に積み上げて燃えつきるのを待つ。それは田の害虫を寄せ集める風習であろう。燃えつきる松明に見入る人の顔は一際印象に残る祭りである。（三重県神社庁）

諏訪神社略誌

信濃国諏訪大社と同祭神にして富貴円満御願成就諏訪信仰を今に伝える諏訪地区二百数十戸の氏神

記

古代の霊地笹ヶ岳を望む眞諒山長楽寺の境内に朱雀帝（930-945）の頃甲賀三郎兼家と申す者自己崇拝の諏訪大神を信州より勧請したと伝える古社にして天正伊乱後明歴三年（1657）現本殿を再興明治初年長楽寺を廃し同41年地区内神社を合祀し合わせて境内整備に努め今に至る

文化三年（1816）伯家神道長官

資延王扁額奉納あり

（神社石碑）

由　　緒：

当社の創祀については、詳らかにはし難い。社傳によれば、平安時代朱雀院の御世江州甲賀郡の郡司、甲賀三郎兼家なる人物が諏訪大神を当地に勧請して祀ったと伝える。近世の地誌類『三国地誌』には「諏訪祠　神明八幡宮相殿本社はもと長楽寺の鎮守なり」と記す。又、現存する明暦3年（1657）の棟札より、この年本殿を再興したことが判る。江戸時代には、近郷の産土神として崇敬されていた。明治40年（1907）同社境内神社津島社　金刀比羅社並びに、大字比曽河内鎮座　無格社山神社（4社）　同八幡社同稲荷社同水防社及び同境内神社稲荷社をそれぞれ、合祀した。

（三重県神社誌　三重県神社庁）